
遠未来願祈 イノセンス

記桜流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠未来願祈 イノセンス

【Nコード】

N3860V

【作者名】

記桜流

【あらすじ】

永遠の命を願った少女トラネルは『非人間』として奴隷同然の扱いを受けることとなる。

死ぬことさえも許されない奴隷として始まった人生の未来に絶望以外の物は何もなかった。

1 Down Down Down

トラネルはとにかく走った。もはや人間ではない身で「人間として生きたい」と必死になって走った。

美しい透明にも近い白髪はすっかり汚れ黒くなり、洋服もところどころ敗れみすばらしい姿となっていた。

手足は自らの血液で赤く染まっているのに、トラネルは無傷だった。だが、何日もろくに食べ物をお口にできず、眠らず走り続けていたトラネルの体はボロボロだった。力もろくに入らなかった。

「逃げ切れるはずがない」

そうトラネルが強く感じたとき、長いこと動き続けていた足は静かに止まった。その途端に立っていることすらできなくなり、冷たいコンクリートに膝をついた。

トラネルの涙を雨は全て隠してくれた。しかし雨さえもトラネルを嫌っているのだろうか。その雨は涙を隠すには多く、そして強すぎた。

トラネルはすでにたくさんの黒服の男たちに囲まれていたが決して顔を上げなかった。

力が入らないせいか、雨で衣服が重たいせいか、たまりにたまった疲労のせいか……それともトラネルに動く気がないせいか……押さえつけられても、腕を拘束されても、トラネルは動かなかった。

トラネルの第三の人生の始まりだった。

2 Sad Lonely Sad (前書き)

おこしいいただき、ありがとうございます。

少し長めとなつてしまいました

が ゆっくりしていつてくだされば光栄です (^ ^)

2 Sad Lonely Sad

トラネルは冷たい鎖の重みを感じながら、うつすらと静かなため息をついた。数多くのすすり泣きの声や叫び声の中では、そのため息はなきものとなった。

それなりに人口密度が高いはずの部屋は冷えきっていて、はだしで黒くなっている足が痛くなった。

汚すぎる服の泥を爪でこすりながら、「こんなに感情がないのは私くらいなものだろう」とトラネルは寂しく思った。

一瞬、「今は、泣きたいほど辛く、悲しいはずだ」と思い、「泣けるのではないか」と考えたが、「そもそも、そんなことを考える事が普通ではない」と気が付き、再び自分の感情がどれほどないかを知った。

「この『寂しい』という気持ちがなくなっちゃったら、私は本当に人間に戻れない化け物になっちゃうんだろうな」

誰にも聞こえない声でトラネルがそう呟いたその時だった。

「あなたは、ずいぶんと落ち着いていらっしゃるんですね」

その声はトラネルが驚くほどこの場には似合っておらず、鈴が鳴ったようなかわいらしい落ち着いた声だった。

「この人の方がよっぽど落ち着いている」そうトラネルは感じたが、

声を出すことができなかった。

声の主はこれまたこの場には似合わないような笑顔で、トラネルの前にしゃがんだのだ。花が開くのを連想させるような可憐な笑顔だった。まだ、十代半ばほどの少女に見えた。

泣いたり、叫んだりしていないのは自分だけだと思っていたトラネルは不思議で複雑な気分になった。

「あなたは、今驚かれています」

聞こえやすいようにはつきりと最低限の声で少女はそういった。

トラネルには訳が分からなかった。黙っていることしかできなかった。

「あなたは、自分が思っている以上に感情を持っているのだと思います」

トラネルは今度は不気味に思った。この叫び声あふれる中で先ほどのトラネルの言葉が聞こえたはずがないのだ。

トラネルが警戒をしていると少女はまた口を開いた。変わらない鈴のような声だった。

「ごめんなさい。わかりきったことを言ってしまった……。ごめんなさい」

本気で謝っているのがトラネルにも感じられた。少女を逆にかわいそうだと思うほどだった。

トラネルの頭の中には一つの結論が生まれた。

(この子も人間じゃあないんだ……)

「ひとつ、同じ立場の人に聞きたかったんです」

そう話した少女の言葉は震えていた。それとは不釣り合いに、意思をもったような大人びた表情だった。

「なんですか？」

はじめて答えたトラネルに安心したように微笑みなおすと、雨に打たれた花のような表情をして、じっと目を合わせた。

「私たち罪人がこうなってしまうことは仕方のないことなのでしょうか？」

時間が止まったようだった。トラネルの心臓がドクドクと音を強く立てた。握りしめた手に力が入った。背中に汗が流れた。

しばらくの沈黙の後、少女は手を胸の前に組んでギョツと目を閉じて、トラネルに聞いた。長く伸びた少女の髪が前にたれ、コンクリートの地面についた。

「そもそも私たちは本当に罪人なのでしょうか？ 私たちのした裏切りは本当に罪だったのでしょうか？」

2 **S a d L o n e l y S a d** (後書き)

読んでくださってありがとうございました。

これからもがんばりますので見捨てないでくださったら

うれしいです！

3 Wish fear fear

『胸を突き刺されたような気分』とは、本当にこのようなことで、トラネルは身動きどころか呼吸すらできなかつた。ただ、トラネルの体は痙攣けいれんしているかのように大きく震えていた。

「！ごめんなさい……」

少女は膝をついて、ガチャリと鎖をならしながら謝った。

「気にしないで」とトラネルは言ってあげたかった。

見るからに優しく繊細そうなこの場には不釣り合いな少女を困らせたくなかつた。

彼女の癒される、明るい笑顔を守りたかった。

トラネルは震える体を鎖とともに腕で押さえて、ゆっくりと傾いていた体を起こした。呼吸がしづらかつたために。そして、首にもある鎖のせいで頭がやたらと重たく感じていた。

「……………気にしないでください……………」

やっとの思いでその言葉をはっして、少女の顔を見たときには、少女の涙がコンクリートを濡らしていた。

「……………そうですね……………思い出したくもなかつたですね……………それにわからないですもんね。誰が、どんなことをした人が……………。ど

んなこと考えている人が………罪人かだなんて」

少女の小さな体がガタガタと震えていた。声はほとんど息となっていた。

さつきまで、微笑んだりトラネル（他人）に話しかけたりと、あまりにこの場にあわないう子であったのに、少女は一瞬にしてこの場所にふさわしい姿となった。

トラネルはすぐ近くにある少女の肩にそっと、ゆっくり手をおいた。少女の方もトラネルの腕も震えていた。

（……大丈夫……。私にはまだ感情がある）

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

少女は声にならない声で謝り続けた。

トラネルはゆっくりと声を出した。震える声だった。勇気を出したのに、声にはまったく力が入っていなかった。

「私こそ……ごめんなさいね。………私だって………そのことがどうしても知りたかったんです………」

トラネルの目から涙があふれてきた。それはトラネルに感情があるということの確かな証明であった。止めようとしても止めようとしても、指の間から涙が流れ、涙は鎖をつたっていった。

少女はじっと、まるで祈っているかのようにトラネルを見つめていた。

「っ……それにつ……自分が罪人なんてっ……絶対につ信じた
くなくて、っ……でもっそれなのに今更、っ……人間に戻りた
いっつて……思っちゃうんです……」

トラネルは情けなく思った。見るからに年下な少女の前でこんな
にも泣きじゃくってしまうことが。ただそれと同時に、こんなにも
感情があふれ出ていることが、うれしかった。

「……私っ……人間に戻りたいんです……。私っ自分がっ……
どどん化け物に近づいているように感じちゃうんです」

トラネルの涙は止まらなかった。

3 Wish fear fear (後書き)

お読みくださり光栄です。

ありがとうございます。

これからもイノセンスを宜しくお願いします!!

また、読んでくださったら、うれしいです。

4 Verrat Tränen tear (前書き)

きおるです

おこしいいただき、光栄です。

4話目となりました。

どうぞゆっくりしてってください。

しばらく、トラネルの涙は止まることがなかった。少女もピクリとも動くことなく、トラネルの前にしゃがんでいた。

「……ごめんなさい………」

「えっ！………」

突然のトラネルの謝罪に少女は声を上げて驚いた。涙でボロボロとなった少女の顔の顔がきよんとした。少女はやっと、当初の落ち着きを取り戻していた。

「何を謝るのですか？」

「こんなに、見ず知らずの方の前で泣いてしまっ……心配かけてしまっ……しかも、っ……質問にだっ……ちゃんとっ……答えられてないし………」

「いいんです。そんなこと、気になさらないでください。私が悪かったですから………」

少女はトラネルの目をじっと見つめた。

少女は再びふんわりと笑った。天使を思わせる笑顔に、女の子であるトラネルもどきりとした。

「やっぱり、あなたにはたくさんの感情がまだまだ、残っています

「よ」

落ち着いてきたトラネルの頬に再び涙が伝った。体全体が熱くなるのを感じた。手足の力が抜けた。

「だって、あなたからはたくさんの音が聞こえてきますもの」

「あなたも、人間ではないのですね……やはり……」

ずっと、聞きたかったことなのに、その言葉はポロリと口から出てきた。

「ええ。……そして、わたしも、人間に戻りたいんです。」

少女はふんわりと笑った。トラネルはうれしかった。自分と、同じ考えの人がいて喜びに満ちていた。

(あっやっぱり感情がある……)

少女は目を閉じた。長いまつげが美しくカールしていた。少女は呼吸を少し整えるように、深呼吸をして、トラネルを見つめていった。

「フェラットです」

「えっ……」

少女の笑顔は天使であった。

「名前です」

「あつ……私……トラネルです」

「宜しくお願ひしますね。トラネルさん。これからも、奴隷と墮ちた後でも、また会いたいです。お話できて、うれしかったです。今、この時、私人間となれたような気がしました」

（この子は私の感情を引き起こす天才だ。また会いたいのは私の方……）

「また、会えますよね。フェラットさん」

「ええ。絶対」

いつまで命があるかわからないトラネル達にとって、絶対なことなど本当は何一つない。それは二人ともわかっていたし、もう明日には死んでしまいかも知れなかった。

（こんな、鎖でつながれている身であっても、私は死ぬことが怖いんだな……）

トラネルはそう心の中でつぶやいた。

頭に激痛が走った。

（そうだった……私は死ねないだった……）

(生まるじとのほつが……よつほつせ……)

4 Verrat Tränen tear (後書き)

お読みくださり

ありがとうございました)・・(ヾ

ダークなお話となってしまうておりますが

今後ともよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860v/>

遠未来願祈 イノセンス

2011年10月9日13時44分発行